

# 平安時代漆芸技法資料 X

## ——嚴島神社古神宝類——

中 里 寿 克

1. 木地塗螺鈿飾太刀 重要文化財
2. 双鳳文螺鈿平塵飾太刀 国宝
3. 宝相華文螺鈿平塵飾太刀鞘 国宝
4. 松喰鶴小唐櫃（客人宮銘） 国宝
5. 松喰鶴小唐櫃（中宮銘） 国宝

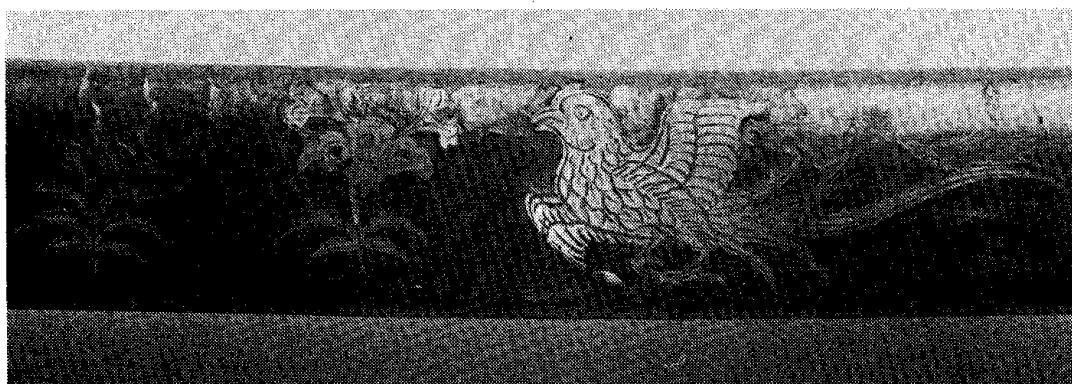
### 1. 木地塗螺鈿飾太刀

鞘長さ 797ミリ 鞘口 28ミリ 鞘尻 21ミリ 幅 12ミリ

#### (i) 地塗と螺鈿の関係について

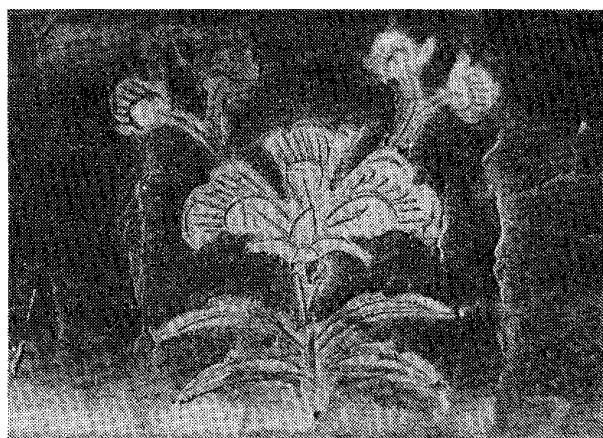
この鞘の見所は幾つかあるが漆芸の上で最も注目すべきは朱又は弁柄漆で塗られる紫檀塗であろう。その紫檀塗と螺鈿の組合せも又特異な例として無視出来ないものである。

『嚴島宝物図会』で見ると、この鞘は折れていた様なので、螺鈿の配置はまったくオリジナルでないかも知れないが、文様は鸚鵡と草花文を組合せ、草花文は表裏ともほとんど残存する



図一1 木地塗螺鈿飾太刀部分

が、鸚鵡文は表の一文を残してまったく失われている(図一1)。表と裏の螺鈿文様は若干異なる事がその痕跡から窺える。表では鞘口の方から鸚鵡が二羽向合う文様が二組続き、次に一羽文、二羽文と鞘口に頭を向けて並び、その間に草花文を点在させる。裏は前半の文様構成は同じだが、次に続く二羽は鞘尻を向き、最後の一羽がそれらと対する様に鞘口に向っている。草花文はこれら鸚鵡文の間に一つあるいは二つづつ配されるが、いづれも開花状態を違え、微



図一2 同螺鈿細部

妙な変化を持たせる(図一2)。

細長い限られた空間内で同じ様な形の鳥文を並べただけでは変化に乏しいが、表裏の要所で鳥形の向きをかえ、更に固い薔薇や咲く花と同じ画面で競わせる事によって広い空間と永い時間を含ませるのに成功している。こうして見てくると紫檀塗の大きなうねりも決して無意味なものではなく、起伏に富んだ大地を現わしているのではないかと思えてくる。黒漆地や沃懸地よりもこのいわゆる紫檀塗が最も相応わしい様に思われてくる。

#### (ii) 紫檀塗について

この鞘の塗は、所謂紫檀塗の最古の例として衆知のものであるが、ここで一考を加えてみたい。

この塗が時代の降る他の紫檀塗の遺例と異なると思われる所は、黒と赤の対比が非常に少ない事である。黒い部分は所々にしか見られず、それらは影の様に薄く、黒漆というよりは刷毛ムラに近いものである。おそらく黒漆をぼかしたのではなく、意図的にその部分の塗りを薄くした様に思える。黒の部分は特に刷毛目が強く、永年の古色がそこに沈着したのではないか。この塗は刷毛目の立つような固目の漆を用い、厚くぱってりと塗っている。このような塗は刷毛目塗と呼ぶのが相応しく、平安時代の文献にみる紫檀塗の典型を見る思いがする。

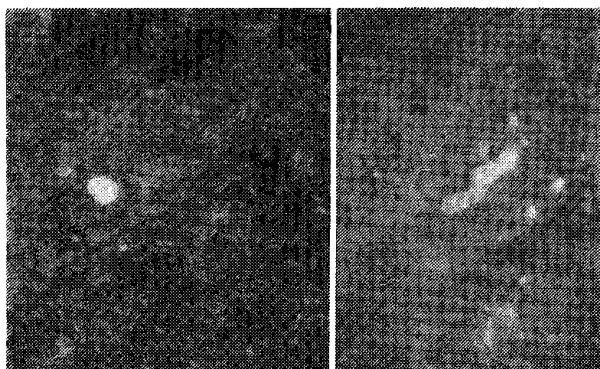
この赤い漆が朱漆か弁柄漆か迷う所だが、色相は後者に近い。朱ではないような感じがするが、後述するように朱塗がより相応しい。

この塗を詳査した結果、所々に粗い金粉が散見出来た。円形又不定形の古代粉でやや平目粉に近く、施工上から故意に蒔かかれたとは思えない(図一3)。多分刷毛に含まれていたのが流出したものであろう。これらの金粉は塵地でなく平塵地の状態にあり、したがってこの上塗は塗立てでない可能性がある。また塗面には粗く横断文が入る。

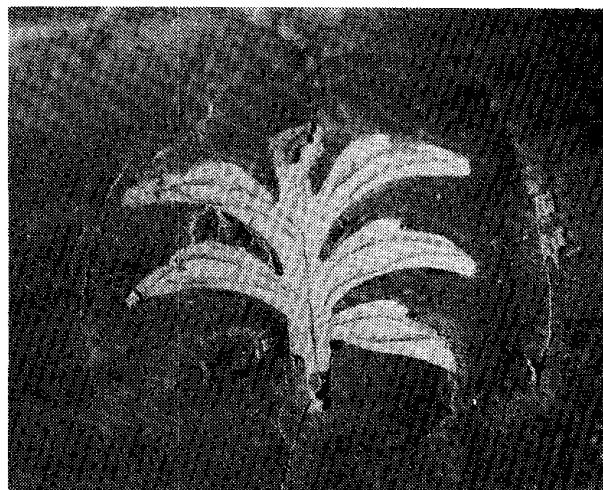
#### (iii) 螺鈿の技法

残存する唯一の鳥文は一枚貝で、最大57ミリ、幅24ミリ程ある。他に13個ある鳥文もほぼ同大だが尾先を継ぐものが幾つかあり、その部分のみ残存する。草花文はこれより遙かに小さく、そして多くは花部と葉部を継ぐ。

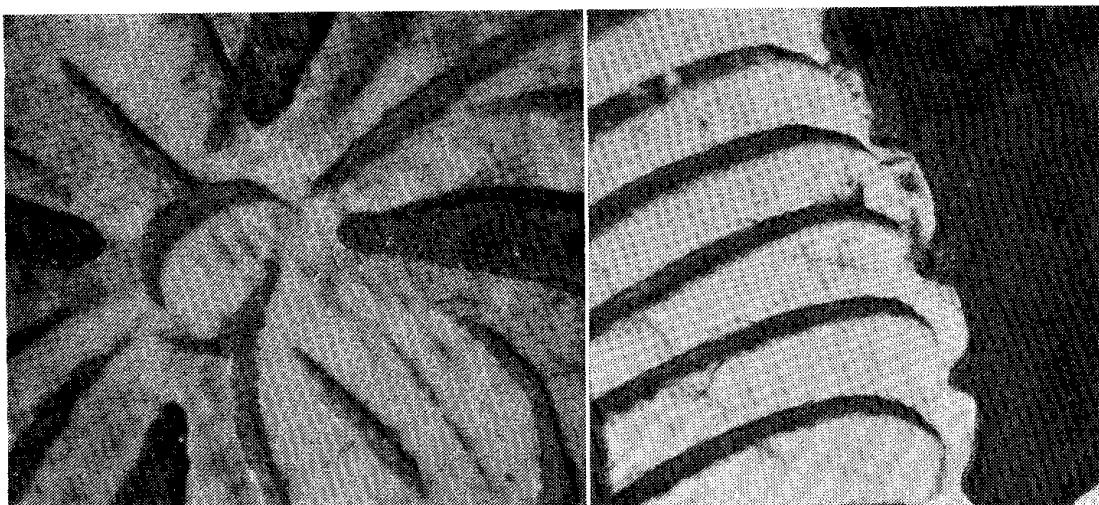
この螺鈿嵌装法は現状では確かめられないが、草花文の輪郭に横断文と区別出来る円形の断文を有するものがある(図一4)。これが偶然的なものでないとすればダイタイ彫りによって生じたものでないかと考えられる。草花文は形が小さいわりに複雑だし、当然行なわれて不思議でない。鳥文部の落脱部を見るとほぼ鳥形に痕跡があり、その周囲にはダイタイ彫りを示すべ



図一3 同金粉



図一4 螺鈿周囲の円形断文



図一 5 螺鈿の切断状態

き断文が見られない。あるいは鳥文のみはかなり正確な形を彫込んで嵌装したかもしれない。修理の手が入り落脱のままの状態で見る事が出来ないのが惜まれるが、深さだけは約2ミリを計る事が出来る。

螺鈿切断法には特殊な所は見られないが、詳細に観察すると興味深い所がある。例えば鳥文羽根の重なりを現わすギザギザや開花文の深い切込部等にかなりの技巧を見るがそこに切断工具を予想出来る(図一5)。それによると径3/10ミリ前後の非常に細い針金状のものである事がわかる。今の所この丸棒の径が遺品によって異なるらしい事がわかつただけでどのような工具か掲んでいないが、直径が異なる事からして複雑な工具でない事だけは確かである。毛彫りは手なれており、片肉彫りで力強く、その運刀は筆線のように自由である(図一6)。

#### (iv) まとめ

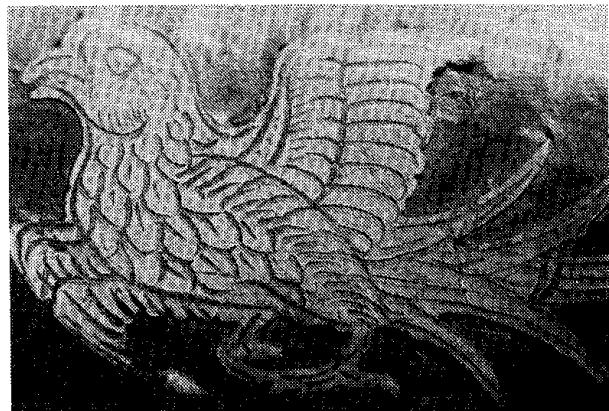
この太刀の飾りは紫檀塗螺鈿として膾灸しているものだが、ここにみる紫檀塗が鎌倉時代の紫檀塗に比較してやや趣を異にしている事から、この塗を刷毛目塗と考えてみた。作者はもちろん当時流行の紫檀塗を行ったのであろうが、その裏に深い意図があつて、鸚鵡と草花文に最もふさわしい塗を行ったのではないか。他に当代の遺例は見当らないのでこの塗のようなものが一般的な施工であったかどうかわからないのだが、もし紫檀塗を越えて豊かな大地を表現したものとすれば深い意味を内在したこの意匠に脱帽しがるを得ない。

## 2. 双鳳文螺鈿平塵飾太刀鞘

鞘長 363ミリ 鞘口 15.5ミリ 鞘尻 11ミリ 幅 9ミリ

地は淡い沃懸地風の平塵地とし、そこに瑞鳥を向会せて楕円文とした螺鈿を表裏に各六個配す。各螺鈿円文間には中間で区切るように宝相華螺鈿文を置く。鳥文螺鈿内は濃い沃懸地とし、宝相華螺鈿文部も砧形に沃懸地とし、上下縁は反対側の同じ部分と菱形に連なっている。

#### (i) 螺鈿の技法



図一 6 螺鈿毛彫

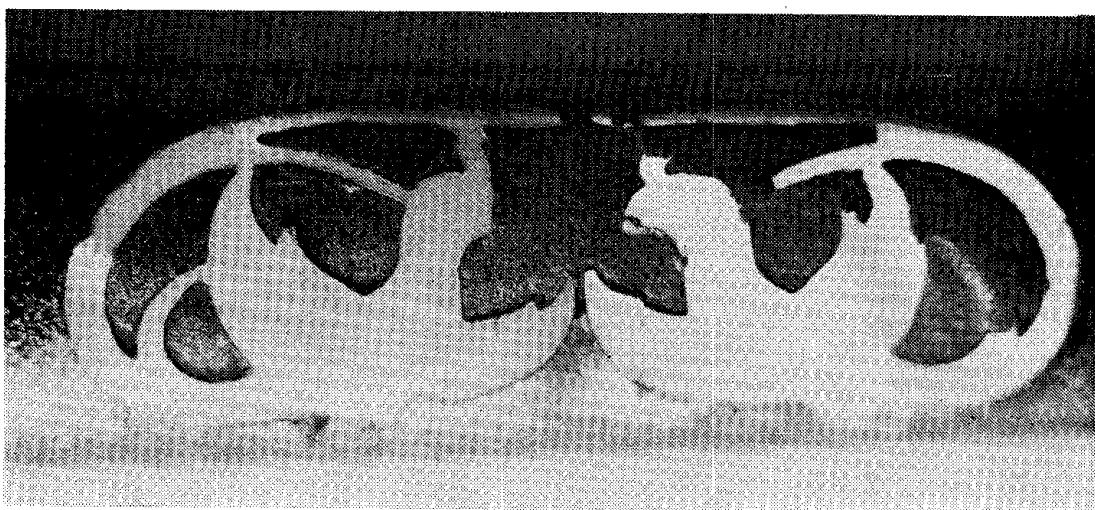


図-7 双鳳文螺鈿飾太刀螺鈿細部

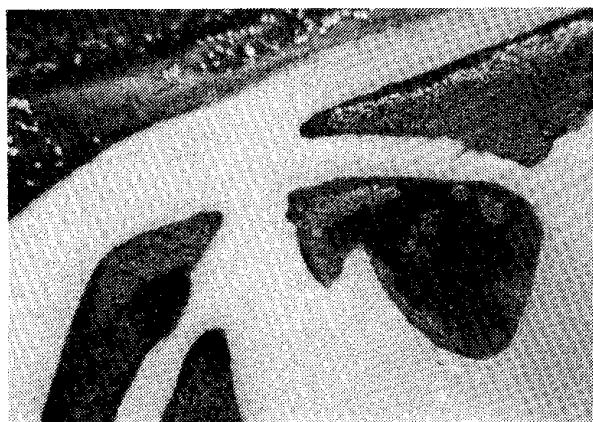


図-8 双鳳文螺鈿切断状態

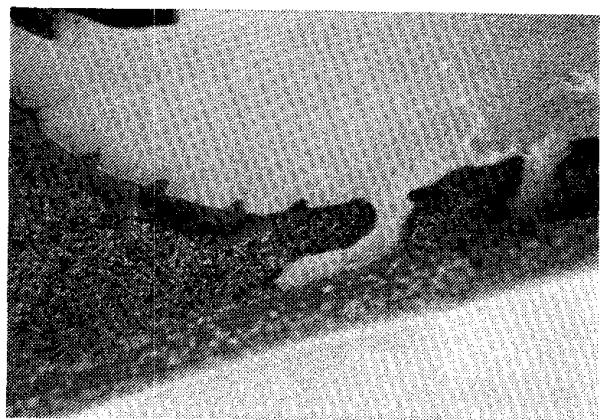


図-9 双鳳文螺鈿切断状態

向会う瑞鳥文は一羽づつ一枚貝を用い、幅は約11ミリだが円文の全長はで29ミリから31ミリほどある(図-7)。これらの螺鈿に毛彫りはなく輪郭もやや不鮮明の所があるが、切透しなどは巧妙に行なわれ、全体としてはまとまりをみせる。これら螺鈿の切断形は、切込み部分などにやはり鋭い丸形の先端を有し、羽根文の表現には、先の鸚鵡文に見られたと同じ径約2/10ミリ前後の半円が認められる(図-8, 9)。

螺鈿嵌装法については現状では把握出来ない。

#### (ii) 沢懸地について

この鞘には大小二種の蒔絵粉が用いられる。大きい方は平塵地として用いられ、小さい方は螺鈿内に蒔かれる(図-10)。

前者は一般的にはほぼ円形で粒子は比較的揃っている(図-11)。この粉の大きな特徴は平目粉に近い平たい粉として観察出来る事である。平安時代の粉はもっと厚みがあり、米粒形を成すのが普通で、粉頭は漆面から突出している。ここで見る粉は平たいため漆膜の下に沈んだもののがかなり多く存在している。

後者の粉は今のべた平塵粉よりやや細かく、1/3~1/4ほどの大きさである(図-12)。粉形はやや角ばった円形不定形のものが混じっているが、その形は小さいわりに概して明瞭で、典型的な平安時代粉として認めてよいものである。この内には細く長い粉が点在しており、それが異質の粉として目立つ。この現象は次の宝相華螺鈿飾太刀鞘の沃懸地に更に顕著に認められているので、そこで改めて述べてみたい。この細粉も又一部に漆層の下に沈んだものが見られ、

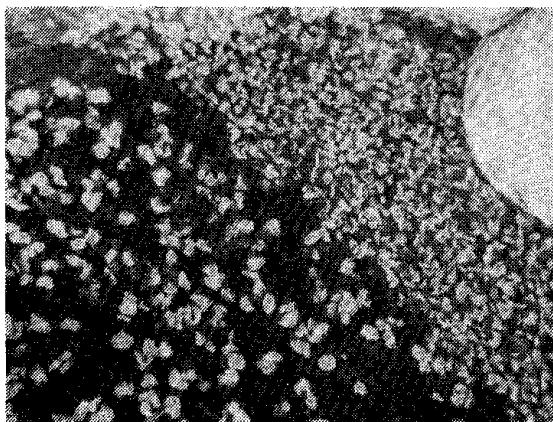


図-10 双鳳文螺鈿飾太刀沃懸地

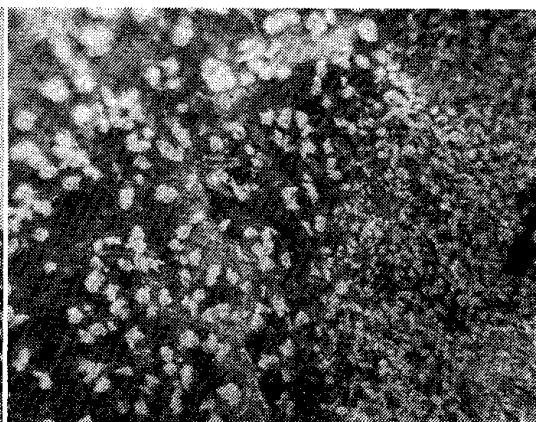


図-16 宝相華円文螺鈿飾太刀沃懸地

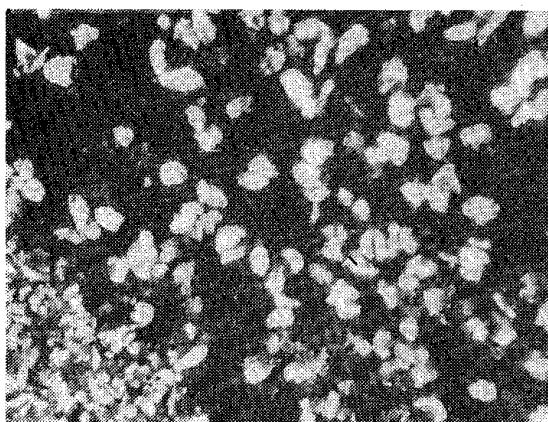


図-11 双鳳文平目状粉

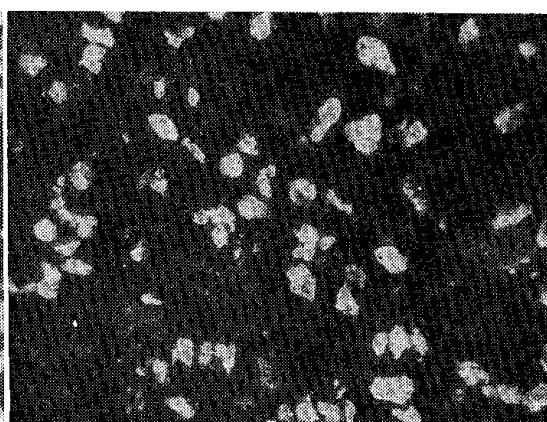


図-17 宝相華円文平目状粉

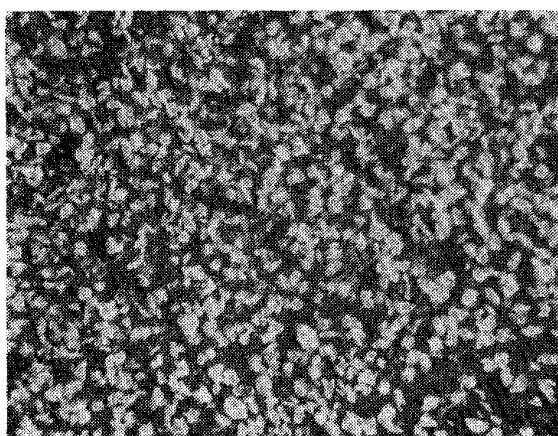


図-12 双鳳文沃懸地粉



図-18 宝相華円文沃懸地粉

梨地の様相を示す。したがって平塵粉と同様、平目粉に近い粉と想像出来る。上塗の漆はしたがって透漆であろう。

### (iii) まとめ

この鞘の作りは華奢で、まさにミニチュアだが、蒔絵の技法は本格的なものである。ここ特に興味深いのは平塵粉および沃懸地粉で、外観は漆をかぶった状態で見られ、御神宝としての環境が劣化を遅らせたものと解された。実際は両者とも平目状の粉である事がわかり、平安時代の遺品中に古代粉以外の粉を見出した事は、造粉法の歴史の上から極めて注目すべき事実と思われる。後で更に考察を加えたい。

### 3. 宝相華文螺鈿平塵飾太刀

鞘長 477ミリ 鞘口 19ミリ 幅 9ミリ 鞘尻 15ミリ

螺鈿による宝相華円文は帯表裏とも三個を配し、その各中間には半円文を二つ組合せた螺鈿文を置く。螺鈿内は濃い沃懸地に仕上げ、余白部分は平塵地とする。これら螺鈿文の配置は当代の建築彩色に見られる宝相華円文に同巧のものである。

#### (i) 螺鈿について

螺鈿は一部分の欠損が見られるものの、ほとんど残存する。

これら螺鈿の文様構成は平安盛期の文様に比すると、やや趣を異にし、特に円文では有機的に連続せず形式的な所がある。中心に花文を置き、左右に延びるこの文様の形体には二種あり、帯裏ではやや文様構成を省約した円文が認められる(図-13)。文様は一花を一枚貝で表わし、組合せによる表現は行っていないので、全体に密度が薄く、技巧的な感じは受けない。

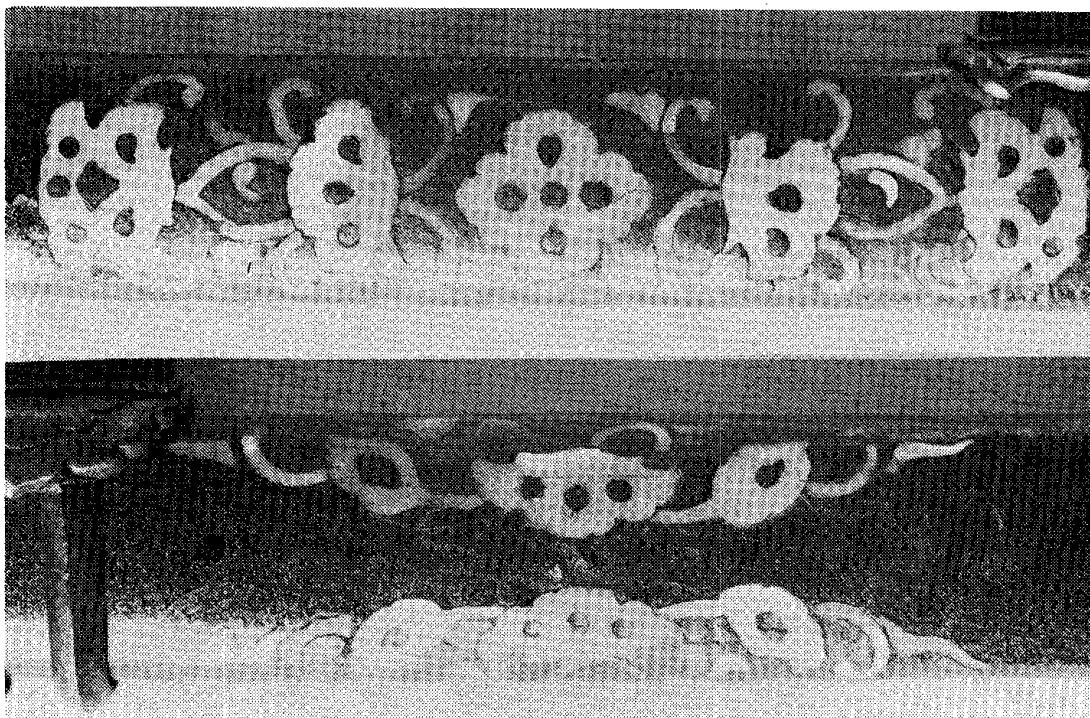


図-13 宝相華円文螺鈿飾太刀螺鈿細部

円文部における一個単位の螺鈿形は整ったもので、デフォルメされたものはほとんど見当らないが、半円文部における花文には形が不自然なものや歪んだものが数多く見られ、前者と著しい違いがある。文様構成の上では半円文は従であろうが、製作者が異なったか、又は後補かもしれない。

螺鈿切断施工の上からみると、かなり要領のよい所が目につく。例えば円文の両端にある開花文はやや複雑な形にみえるが、実際には元の形は単純で、花弁の重なり等を表わす凹みはヤスリのようなものでちょっと切込んだだけであり、花芯もやや大きな丸い穴をあけて一部にちょっと切込みを入れてお玉杓子形にしているにすぎない(図-14)。この内のいくつかは丸穴だけの所もある。螺鈿の輪郭を拡大してみるとかなりの小さな凹凸がみられ、スムースに切断されていない様子がわかる(図-15)。このように目立つ粗さは、他の螺鈿遺品には見かけないものだが、これが工具によるのか、工人によるのか、ヤスリによる加工がなされない為なのか問題としたい所である。

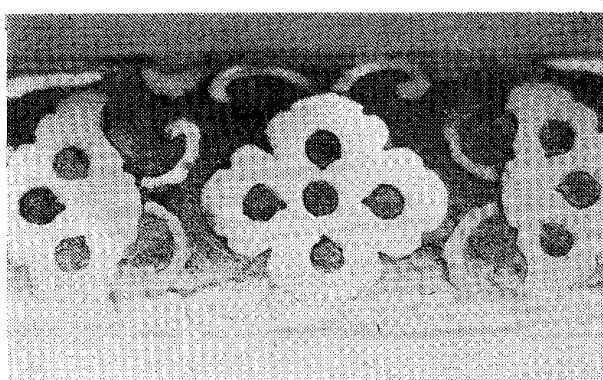


図-14 宝相華円文螺鈿細部



図-15 同螺鈿切断状態

これらの螺鈿にも当然切断工具の痕跡が認められるが、やはり小丸形で、直径0.3~0.5ミリのものが用いられる。この痕跡は螺鈿輪郭にも留めており、ヤスリが積極的に用いられていない事がわかる。図-15を見るまでもなく、たとえ小部分でも未加工の輪郭がかなり粗い場合もある事を確認し得た。

螺鈿円文の長さは不定で、60~70ミリほどあり、幅は約11ミリである。半円文形は長さ42ミリ前後ある。螺鈿の最大のものは開花文で11×9ミリ、それほど大きなものでない。鞘面はもちろん若干カーブするわけだが、それに添わせて彎曲した貝を吟味したかどうかはわからない。更に螺鈿嵌装法についても周到な修理が行なわれていて窺う事は出来ない。

#### (ii) 沢懸地について

澤懸地粉は二種用いられる(図-16)。すなわち螺鈿内部分には細粉による濃い澤懸地が(図-18)，それ以外の部分には粗粉による平塵地が行なわれ(図-17)，双鳳文螺鈿飾太刀の場合とまったく同巧である。

まず前者の場合は螺鈿を囲むように蒔かれ、螺鈿の花芯内にも及ぶ。この粉は一般に丸味のある粉だが、米粒形のも散見し、その内に異質の粉として細長粉がかなり混じる。丸形粉と細長形粉という対称的な形のものが混在するのはまことに不自然な外觀だが、漆の下に沈む粉が多いのは、この粉も多分平目状の粉として認めざるを得ない。おそらく細長粉は平目状粉の断面を示すのではないかと想像する。つまり平らに付着せずに突きささるように付着したまま固定され、研がれたため、断面が現われたと考えるわけである。平安時代の粉でここで見られる細長粉に近い粉形を示すものが無いわけではないが、混在する事はないので、この場合の状態とかなり異なる。後者の平塵粉は、これより数倍大きいもので、一見して平目状の粉とわかる。粒子はよく揃っていて円形に近いものである。この粉もかなり漆の下に沈んでおり、粉頭を露出するのは半分ほどであろうか。

## 4. 松喰鶴蒔絵小唐櫃 二合

面取りの覆蓋を持つ長手の箱で、丸隅とし僅かに胴張りがある。身側面には前後面に各二本、左右側面には一本の脚を取付け、螺鈿の葛文と蝶文で飾る。甲面にはゆるい甲盛りが見られ、身底にも畳づれがある。蓋および身箱の口辺には紐をつくる。箱全体は黒漆塗りとし松喰鶴を金銀で研出しにし、蓋裏では銀の松枝を研出にする。以上二合は、ほとんど同巧だが法量は若干異なり、又松喰鶴の配置も異なる。

#### (i) 「客人宮」銘小唐櫃

甲盛りは甲板が平らでないというだけのもので、頂部から面取り部まで4ミリほどの落差がある。蓋裏は削りがなく平らなので枠組の側板の上に厚さ7ミリほどの甲板をのせ、甲板周縁

部を斜に軽く削って甲盛りとし、更に面取りを削ったものであろう。口縁部では特に覆輪は廻さず塗漆のままだが、蓋の後面にあたる口縁部に円形の小金具が二個打つけられる。その位置は後面脚上に打たれる環金具に対応する場所であり、本来は掛金具があるべき所である。

身箱には六本の脚を取付けるが、紐懸りのような刳り穴は持たない。取付けには裏面を4ミリほど切込み、そこに箱底をひっかけるようになっている。各脚には上下に金具をはめ、菱鉢が二個づつ打たれる(図-19)。ここに実際に釘が打たれているかどうかは内面に何も現われていないので不明である。内面には環金具に対応するかぶせ金が見え、更に、目的不明の小型で古式のかぶせ金が存在するだけである。身箱の側板は5ミリ強を示すが胴張りを考慮すれば10ミリ弱の板を使用しているはずである。このように薄い側板で脚の取付けの痕跡が現われるのは解せない。又四隅の柄組み等についても不明である。

蒔絵は金銀の研出蒔絵で銀を鶴の体に、嘴、脚、眼や松枝に金を蒔分ける(図-20)。蓋裏の松枝には銀のみを用いている(図-21, 22)。

鶴及松枝の描写は必ずしも練達な筆使いは見えないし、又蒔絵の蒔分けにしても技巧を凝したものとは思えないが、十二世紀の一般的な蒔絵の水準は窺えるものである。

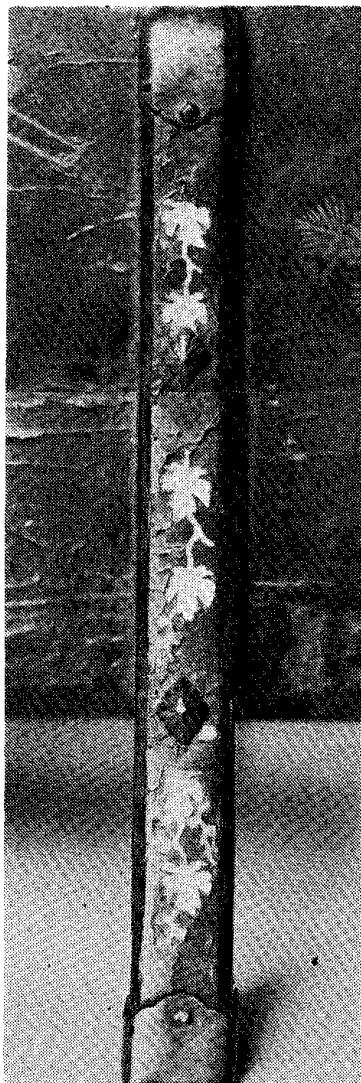


図-19 松喰鶴蒔絵小唐櫃  
脚 (客人宮銘)

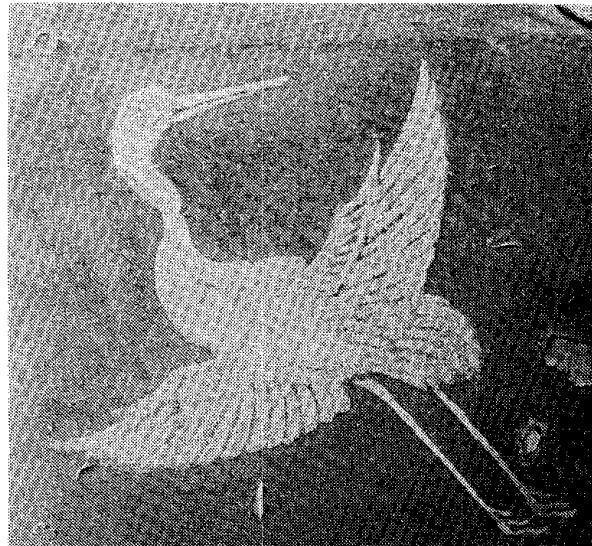


図-20 松喰鶴蒔絵 (客人宮銘) 文様細部

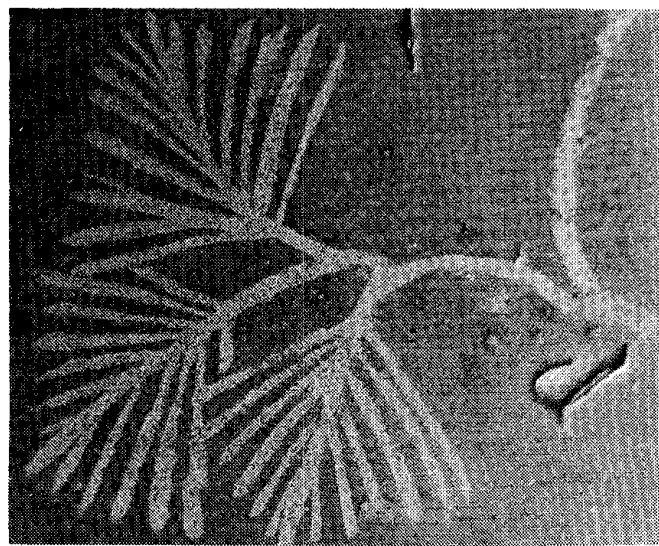


図-21 松喰鶴蒔絵 (客人宮銘) 文様細部



図-22 松喰鶴蒔絵(客人宮銘)蓋裏細部

六本の脚には三面各面に螺鈿で葛文を主に小さな蝶を所々に配している(図-23)。螺鈿は一葉一枚で作るものが多いが、二葉を蔓で連いだやや複雑なものも幾つか挿入される(図-24)。嵌装方法については不明だが、多分ダイタイ彫り式であろう(図-25)。

#### (ii) 「中宮」銘小唐櫃

外観および蒔絵等の装飾の技法は「客人宮」銘のものとほとんど変わらない。ただ鶴文や松枝の配置はまったく異なっており、そこに類似性はない。多分一定の法則——前後面には三羽、両脇面には二羽という割振りをくずさずにフリーハンドで下図を書き、蒔絵を施こしたのである。蓋かづらの前面および向って左脇面は前者と異なって蒔絵が無いが、後補の可能性がある。蒔絵は前者も同様だが、主に線描で表現しており、鶴体の一部にはかき割りもみられる。松枝に見られる線描は研出蒔絵には似つかわしくないもので、平蒔絵のような無造作な筆致が見られる。

蒔絵粉は金粉はかなり細かい(図-27)。円形に近い不定形の粉で、粒子は揃っている。細かいわりには重なりは見られず、ほぼすべての粉頭が露出している。銀粉は錆化によって表面が荒れ、凹凸がはげしくなっている(図-28, 29)。

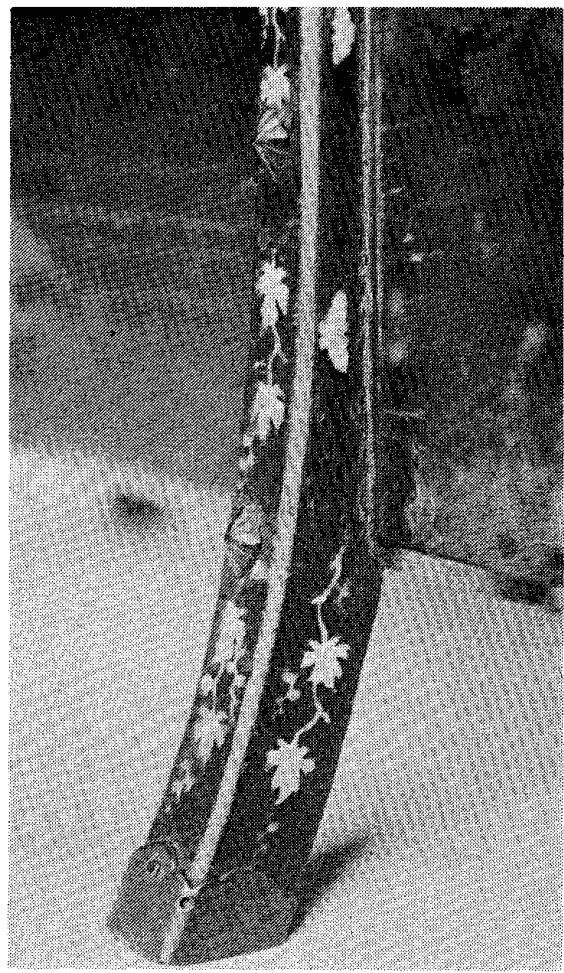


図-23 松喰鶴蒔絵(客人宮銘)脚螺鈿細部

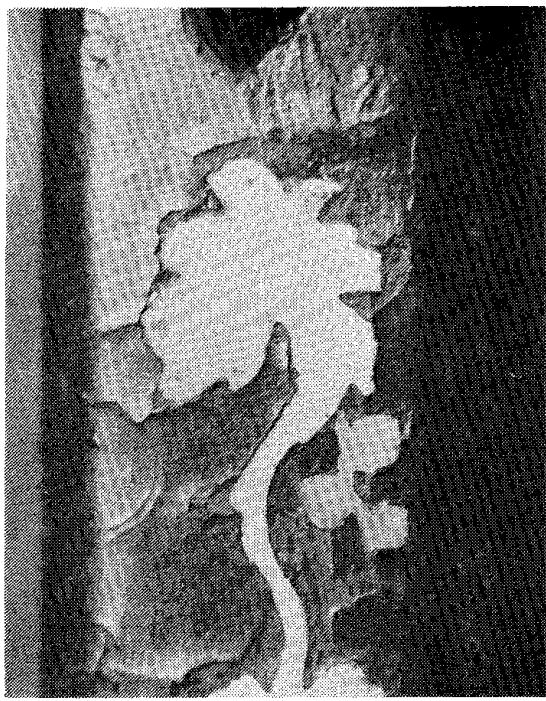


図-24 松喰鶴蒔絵（客人宮銘）螺鈿細部

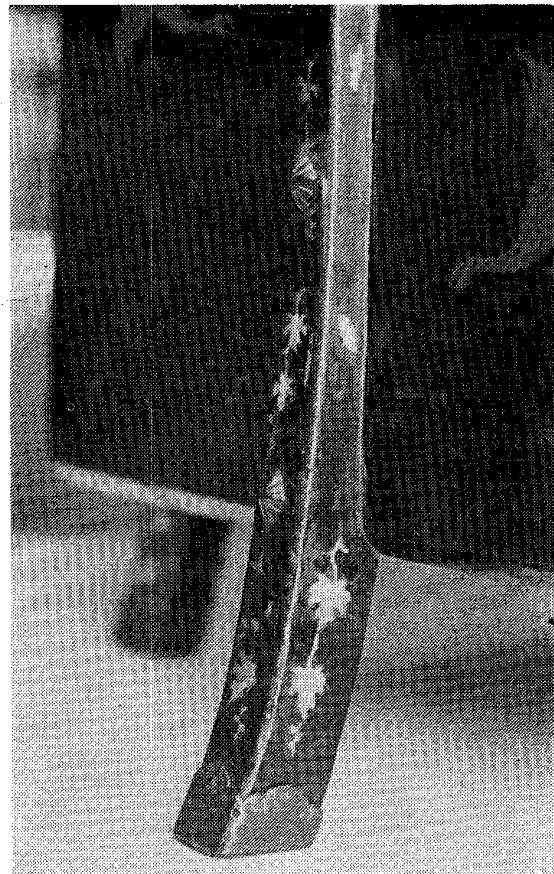


図-25 松喰鶴蒔絵（中宮銘）脚の螺鈿文様

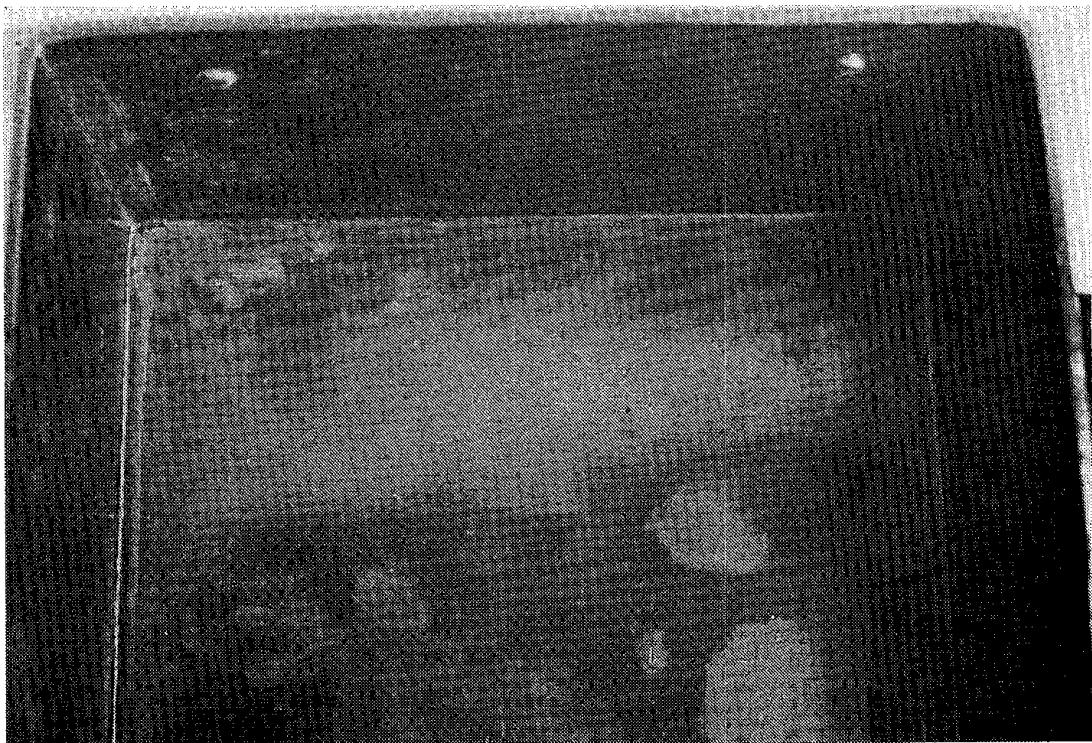


図-26 松喰鶴蒔絵（中宮銘）身内

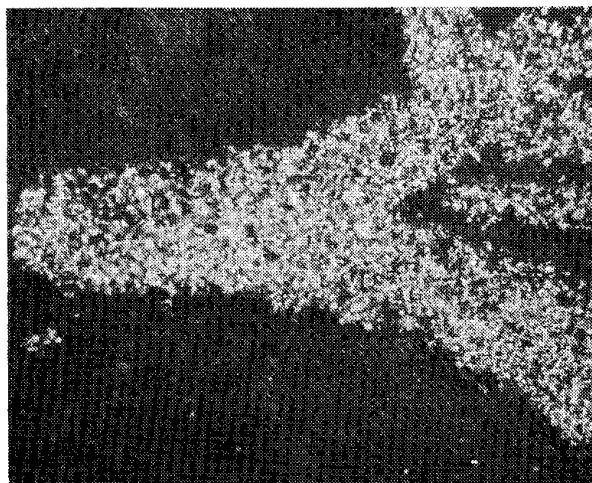


図-27 松喰鶴蒔絵（中宮銘）蒔絵粉（金）



図-28 松喰鶴蒔絵（中宮銘）銀蒔絵細部

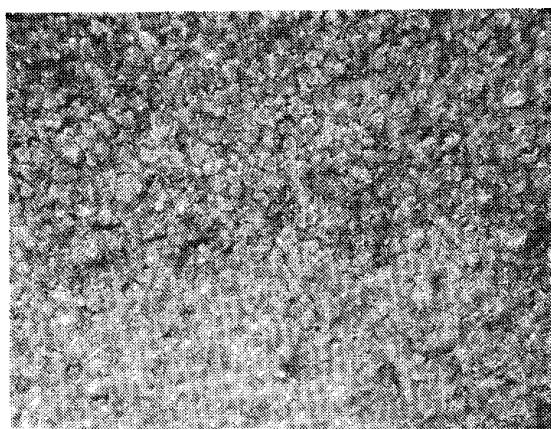


図-29 松喰鶴蒔絵（中宮銘）蒔絵粉（銀）

金よりやや粗く角ばった長方形をしているように見える。

### (iii) まとめ

この二つの小唐櫃は、以上のように非常に類似した外觀を持つが、一つ一つの部分を比較すると意外に異なる所が多い。蒔絵意匠の配置等にも自由さがみられ、両者に同様のパターンはなく、必ずしも画一的に描かれたものでない事が良くわかる。法量なども多少異なった部分があり、両者の細部の寸法を比較すると全高はまったく同じだが箱の大きさに増減があり「客人宮」銘の方が若干大きい。(図-31)。

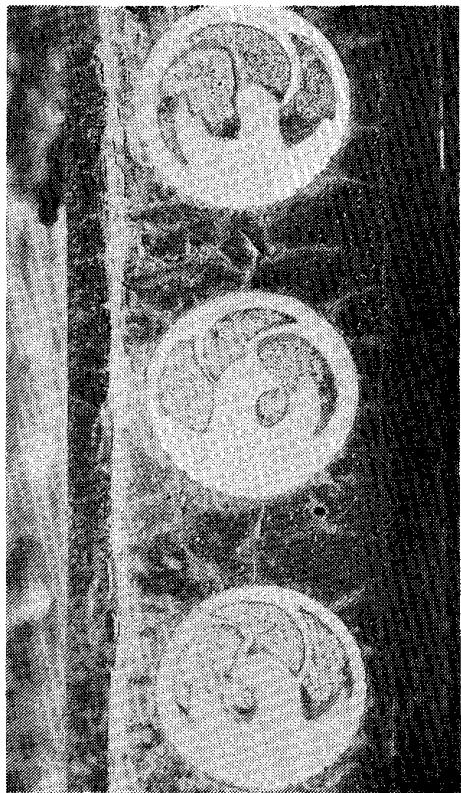


図-30 凤凰円文螺鈿唐櫃（東京国立博物館）の脚細部

## 5. 考 察

双鳳文螺鈿平塵飾太刀及宝相華文螺鈿平塵飾太刀は、野坂家文書によって承安、安元、治承年間に後白河法皇、高倉天皇の行幸の際に奉獻されたものの一つと考えられており、それによってほぼ製作年代を把握出来るのは平安漆芸史の上で貴重である。技法的にみてもほぼ平安後期の作行を伝えている様に思われるが、後述するようにそれらの技法はまさに平安から鎌倉に

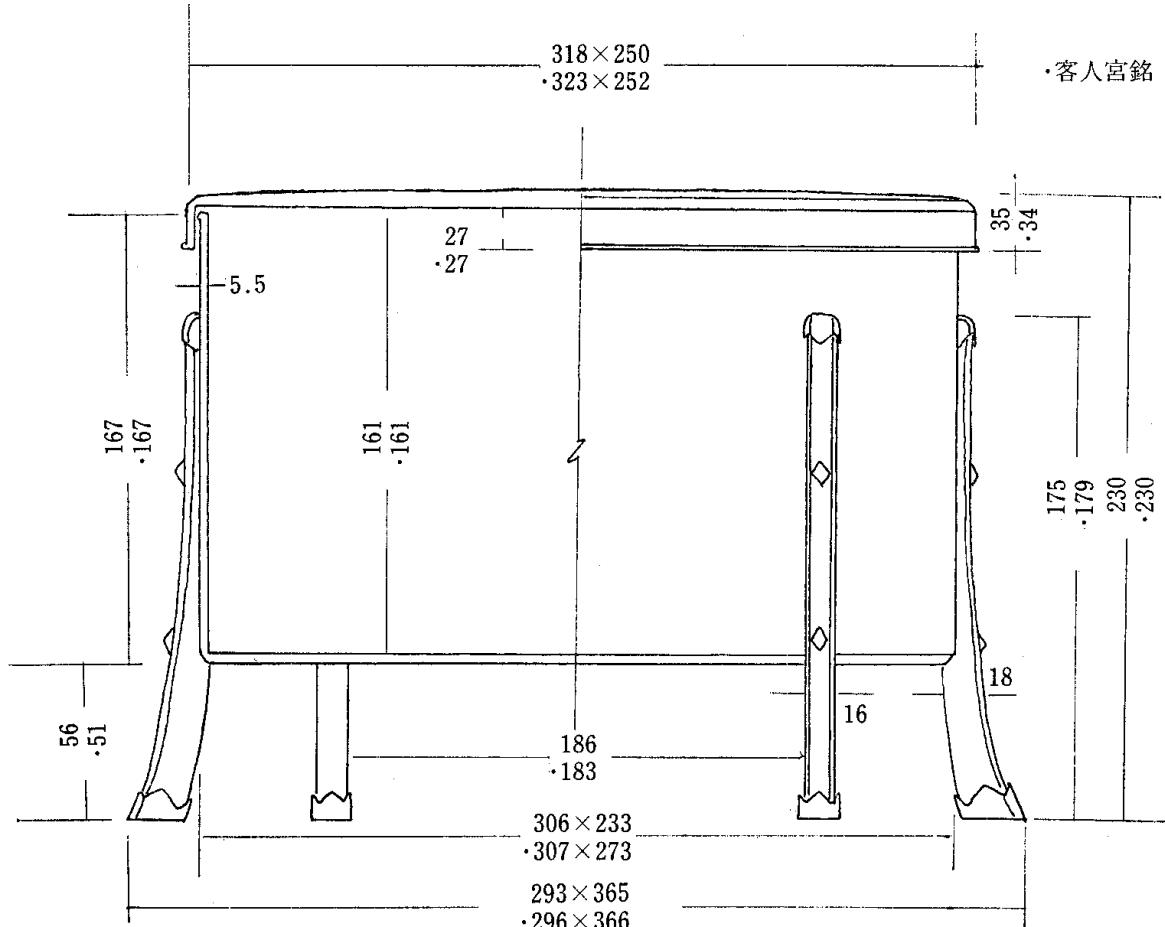


図-31 銘松喰小唐櫃実測図

至る過程の上にあり、金色堂以降の蒔絵の一里塚の役目を果していると考えられる。

宝相華文螺鈿飾太刀における宝相華文の特徴は、宝相華文の中央に独立した開花文を置くものだが、この様式は平安後期の建築彩色の内にまま見かけられる。しかしむしろ鎌倉時代の宝相華螺鈿文にはより顕著に行なわれるようであり、この宝相華文はそれに近いように思える。山崎昭二郎氏によると、団華文の間に半月対称文を置く装飾法は平等院から見られ、醍醐寺五重塔内部装飾より進んだ様式であるとされる<sup>1)</sup>。団華文と半月対称文によるこの飾太刀の意匠は明らかに平等院、金色堂を経て継承された様式という事が出来よう。

双鳳文螺鈿飾太刀に見られる意匠様式は基本的にはまったく前者と同巧のものである。いづれも螺鈿部分を沃懸地で囲み、余地を平塵とするものである。このような技法の近似性は偶然とは認めがたく、非常に近い所で前後して製作された事を否定出来ない。この事は蒔絵粉にもいえるのであって、粉形、状態、どこを較べてみても類似した点を持っている。平安時代の蒔絵粉については今までの調査でも遺品ごとに異った粉形を有し、各々が個性的である事が知られており、酷似性を持つ物はほとんどない。したがって敢て論を進めれば、両者は奉獻の為同時に製作されたと考える事にそれほど躊躇しない。

蒔絵粉は先述の如く平目粉に近いものだが、この事実は造粉史の上で重要な意味を持つ事になる。かつて「古代蒔絵粉の研究」<sup>2)</sup>において平目粉は多分鎌倉時代から造られたとの推論を行ったが、それより若干遡らせて考える必要に迫られた。平目風の蒔絵粉の出現を12世紀まで拡大する事は想像外の事実だが、平安後期蒔絵粉の研究に新たな成果が期待出来よう。

これら飾太刀にみられる螺鈿部分のみ沃懸地で囲んで強調する様式は、十二世紀後半の一つの表現法と考えていいのかどうか判らないが、技法的に類似するものをあげれば鳳凰円文螺鈿

唐櫃（東博）がある。螺鈿円文内は深い平塵地としており趣がやや異なるが、脚には螺鈿小円文を配し、その透しの内を沃懸地としている（図一30）。螺鈿を単純に沃懸地の内に対比させる金色堂様式から、新たな意匠としてこのように平塵を加えた多彩な加飾法が考え出されて来たと思われる。

「兵範記」（仁安三年二月二十六日）に

御劍三腰

（中 略）

一腰 紫檀地孔雀螺鈿細劍 伝右大臣致造獻之

一腰 同鳳凰蠻絵螺鈿細劍 大夫權大納言平朝臣造獻之  
重盛

己上各小劍依 院宣去年致造獻云々

とあり、この頃これら飾太刀によく似た蠻絵風の鳳凰文の螺鈿小劍が造られた事が知られ、12世紀末葉にはミニチュアのような小劍が度々造られていたのである。

木地塗螺鈿飾太刀に見られる地塗りについては先述のように刷毛目塗としたが、もちろん刷毛目塗が盛んであったという根拠は何もない。むしろ紫檀に凝した塗装法は鎌倉時代の遺品にかなり見られる所から、当然先行して平安時代にも行なわれた可能性は充分有りうると見做さなければならない。

この飾太刀は多分平家一門の奉納であったと考えられ、紫檀塗盛行の拠所とされる唯一の物だが<sup>3)</sup>、塗に朱漆が用いられた点に最も注目したい。平安時代の朱器は宮中においては位階資の象徴であり、最高位の器である事は厳然としていた。それが外装として用いられた場合は、料的に裏づけるものはないが、紫檀地に同格か、それ以上の位置を占めていたのではないか。これが凝紫檀の塗装であれば平家一門の奉献品としては沽券にかかる品であったろうが、朱塗であれば納得がいく。だからこそ特別の配慮のもとに神前品として選ばれたのである。

鸚鵡は既に齊明天皇、天武天皇の頃、半島から献ぜられたとされるが『台記』にも「久安三年十一月十日伝聞摂政忠通獻孔雀鸚鵡於法皇鳥羽」とあり、生きた鳥を観賞する事も出来た。当時の飾太刀の意匠には間々取上げられており、「紫檀地鸚鵡螺鈿劍」、「木地鸚鵡螺鈿劍」等が文献に散見出来る。春日大社蔵の紫檀地鸚鵡螺鈿劍がその唯一の遺例である事は申すまでもない。春日大社蔵劍に比してこの飾太刀の技巧は見劣りしないが、責金具等が欠失して完全な姿で遺存しなかった為、やや軽がるしい容姿になるのは否めない。

尚螺鈿と朱塗の組合せは配色の点で奇異に感じられない事もないが、これと同趣向のものに銅板地花鳥螺鈿説相箱（大和文華館蔵）がある。銅板には朱が塗られ、透しに花鳥螺鈿が嵌装される。朱漆地は当時のものかどうか疑問だが、当初の技法を踏襲したものとすればこの飾太刀と合せて非常に興味ある遺品である。ただ正倉院蔵の螺鈿玉帶箱を見るまでもなく、この遺品以後螺鈿は伝統的に黒漆地に行なわれており、朱漆地にというのは管見の及ぶかぎり平安時代の遺品に類例はない。

蒔絵唐櫃は沢千鳥蒔絵小唐櫃（金剛峯寺蔵）や鳳凰円文螺鈿唐櫃（国）が有名だが、箱の形体から見て行くと十世紀頃といわれる雑伎彩絵唐櫃（MOA美術館蔵）から正倉院の唐櫃えと遡ってたどる事が出来る<sup>4)</sup>。それらはいづれ時代性を具備しており、その特徴はおかしがたいものである。松喰鶴蒔絵小唐櫃はもちろんこの変遷のラインの上にあって十二世紀後半の様式を代表するものであろう。鳳凰円文螺鈿唐櫃は技法的、意匠的にみて巖島神社古神宝類と極めて近い所に位置し、先述のように双鳳文螺鈿飾太刀、宝相華文螺鈿飾太刀はまさにその技法を継承しているものといえる。この小唐櫃にみられる蒔絵の技法は、唐櫃の技法に比して大きな距

りがあるが、その箱の形体は大小の差こそあれ、異なる所は少ない。蓋にみるゆるい甲盛から面取りに至る曲線的でない流れは同時代のものといってよく、沢千鳥蒔絵小唐櫃にみる丸味のあるふくよかな形体から比較すると時代の距りは歴然としている。

松喰鶴蒔絵小唐櫃の蒔絵は十二世紀後半と考えられる蒔絵遺品からみると粗拙である事は否定出来ず、技術的にも書割りの技法を多少駆使する程度の極めて単純な蒔絵で終始するが、このような作風を直に京風でないときめてよいのかどうかは難しい。

#### 6. ま と め

厳島神社古神宝類の内、主に漆芸品についてその技法を考察したが、そこで木地塗螺鈿飾太刀における所謂紫檀塗に多少改たな見解を加えたほか、双鳳文螺鈿飾太刀、宝相華文螺鈿飾太刀に見られる蒔絵粉を平目粉と断定する経緯を述べた。しかしこれら古神宝類の最も重要な点は紀年銘を有する事で、十二世紀後半の漆芸を考える上にその役割は極めて大きいといわねばならない。今だ渾沌とした中尊寺金色堂以後の蒔絵技法の歴史が、これらによって更に具体的なものになってくると期待される。

最後に古神宝類の調査に御配慮戴いた厳島神社宮司 野坂元良氏に紙上より深く感謝すると共に調査の際に御協力下さった飯田権明、福田道憲の両氏にもお礼申上げたい。

#### (注)

- 1) 山崎昭二郎「文様彩色」文化財講座『日本の建築』2 第一法規 昭51年
- 2) 中里寿克「古代蒔絵粉の研究」『保存科学』9号 昭47年
- 3) 河田 貞「紫檀塗について」『ミウジアム』318号 昭52年
- 4) 秋山光和「教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画」『美術研究』179号 昭30年

## Technical Data of Lacquer Work in the Heian Period (X)

—Lacquer objects among the “Old Sacred Treasures” of Itsukushima Jinja—

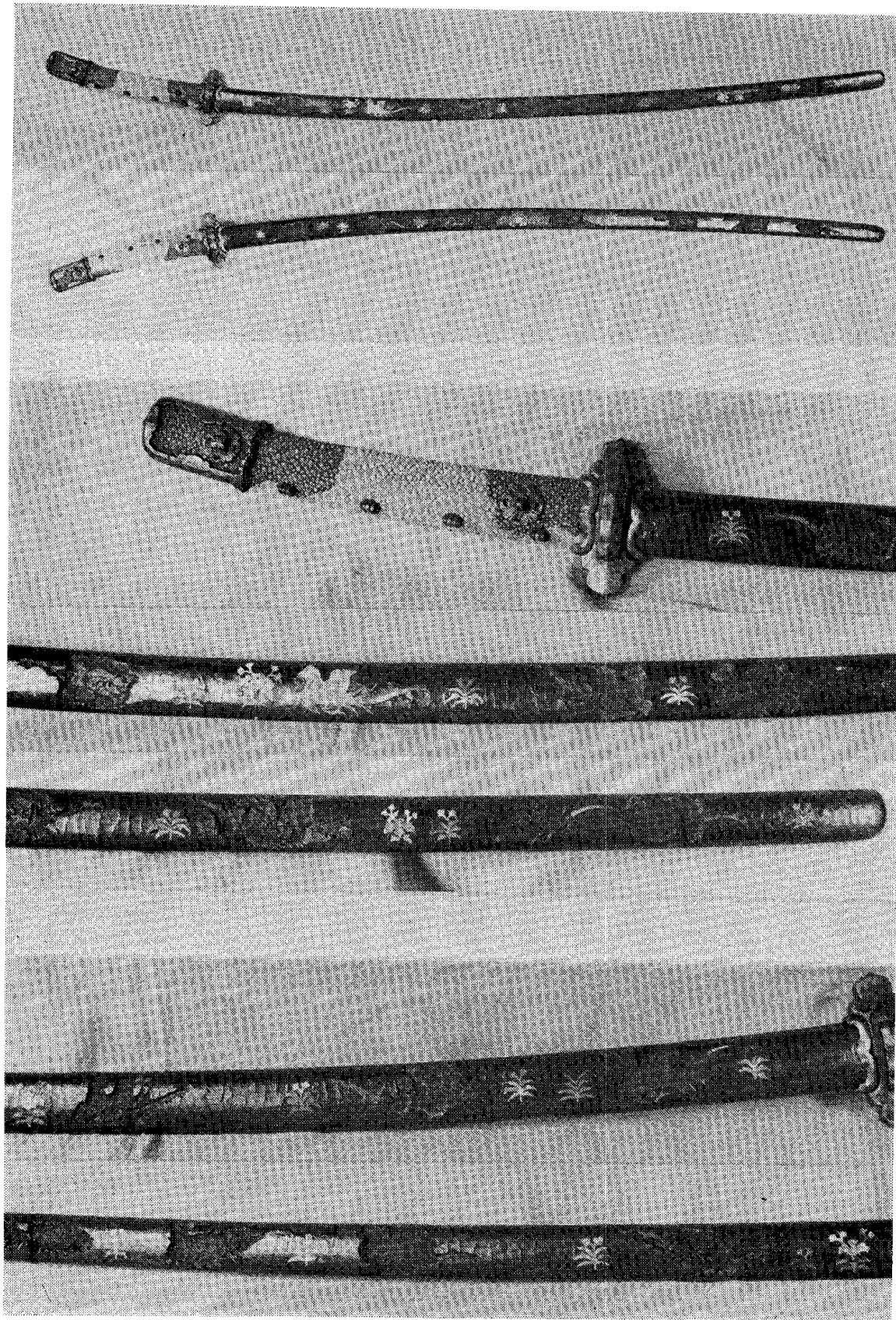
Toshikatsu NAKASATO

The Shinto shrine Itsukushima Jinja threw in the 12th century the patronage of the prosperous Heike (Taira family) of court nobles. It was honored with Imperial visits frequently, and votive objects were dedicated to the shrine on each occasion. The group of these votive objects are now registered by the Japanese Government as National Treasures under the name “Old Sacred Treasures of Itsukushima Jinja.” They include some works of lacquer art each accompanied by a box bearing the date of Juei 2nd year (1183). They are valuable dated examples of lacquerware from the last part of the Heian period.

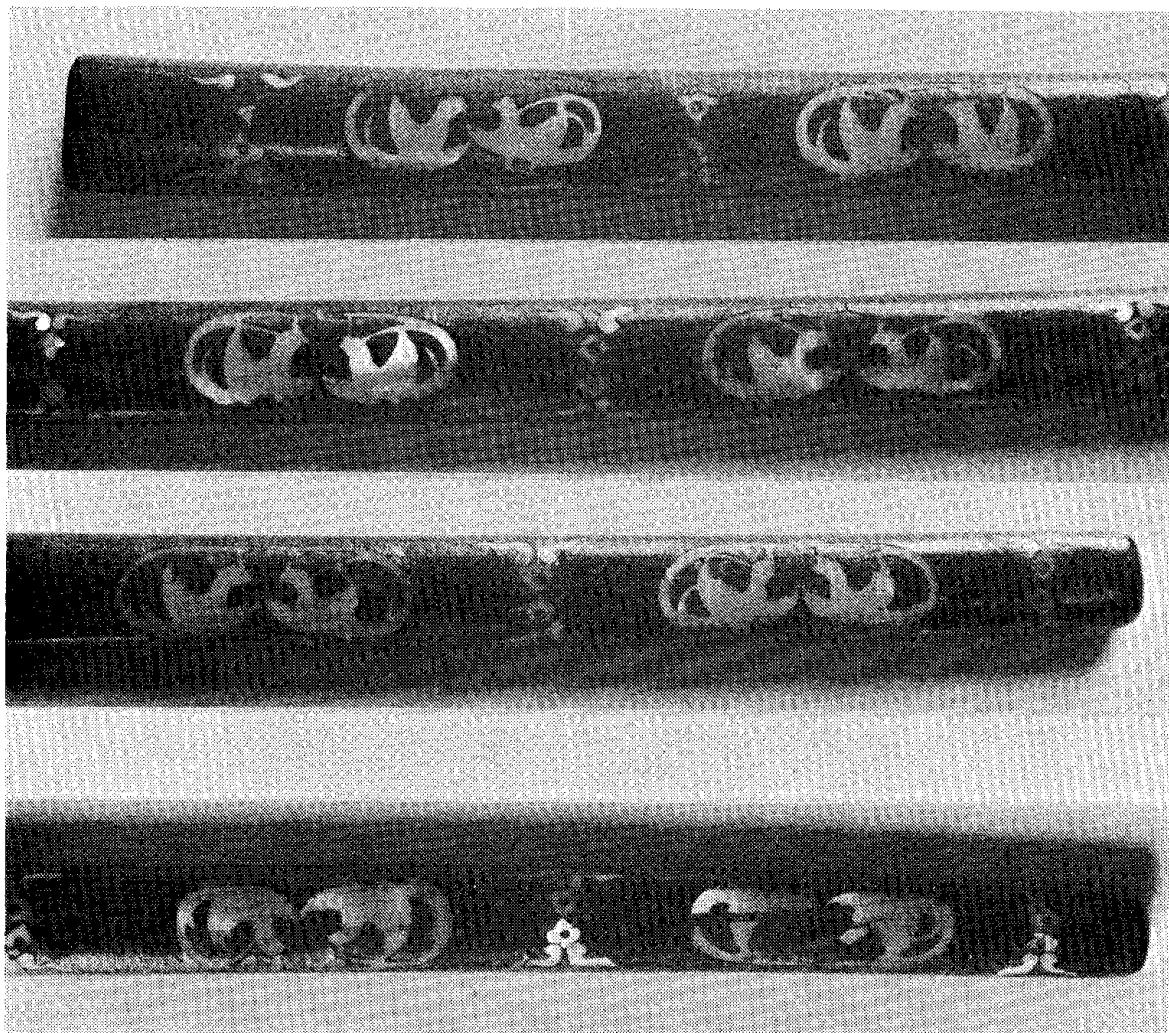
Our researches this time were conducted on (1) sword mounting of *kazari-tachi* (ceremonial sword) type with scabbard of *kiji-nuri* (lacquering showing wood grains) decorated in mother-of-pearl inlay, (2) sword mounting of *kazari-tachi* type with design of paired phoenixes in mother-of-pearl inlay, (3) sword mounting of *kazari-tachi* type with design of *hōsōge* flowers in mother-of-pearl inlay, and (4) two small *kara-bitsu* (chests with legs) with design of *matsukui-zuru* (cranes with pine sprigs in the bills) in *maki-e* (gold-lacquer).

As a major result of the researches, it became known that the *maki-e fun* (metal particles used for *maki-e* decoration) used on (2) and (3) were gold filings of two kinds, rougher and finer, which were judged to be *hirame-fun* (flat filings). *Hirame-fun* had been found mainly on pieces from the 13th century and afterwards, but our researches proved that its use dates back to the 12th century.

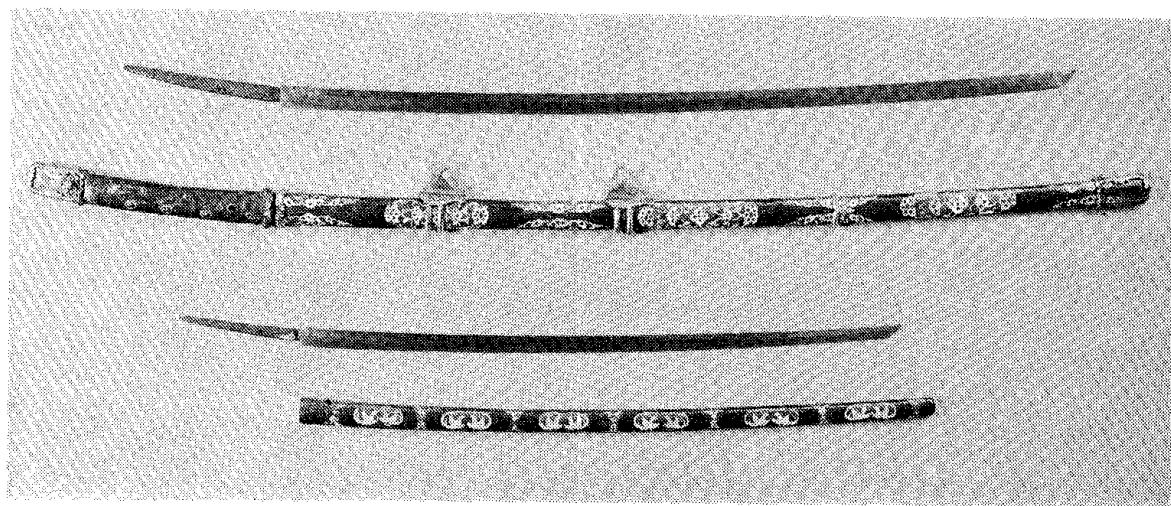
translated by Shigetaka Kaneko



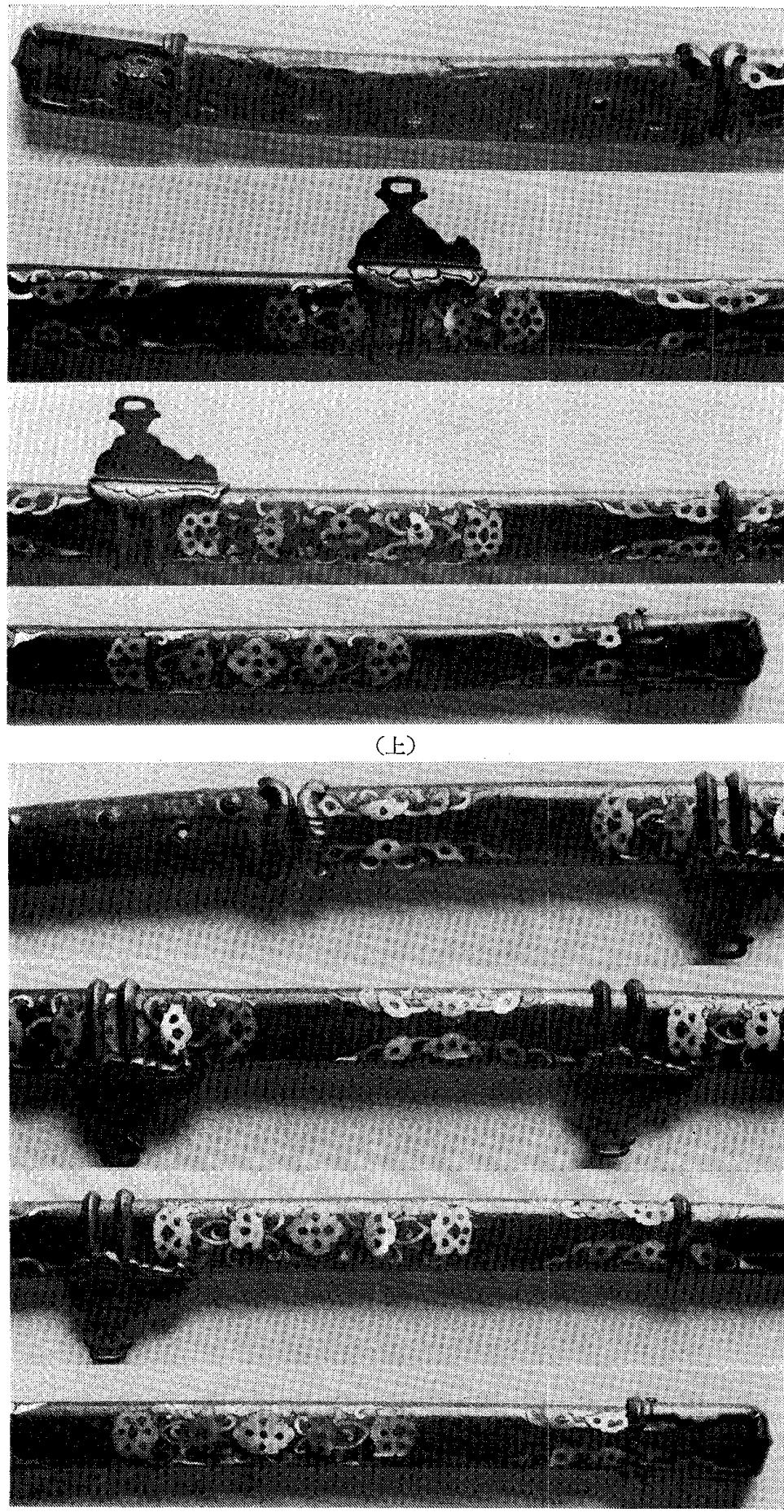
付図-1 木地塗螺鈿平塵飾太刀



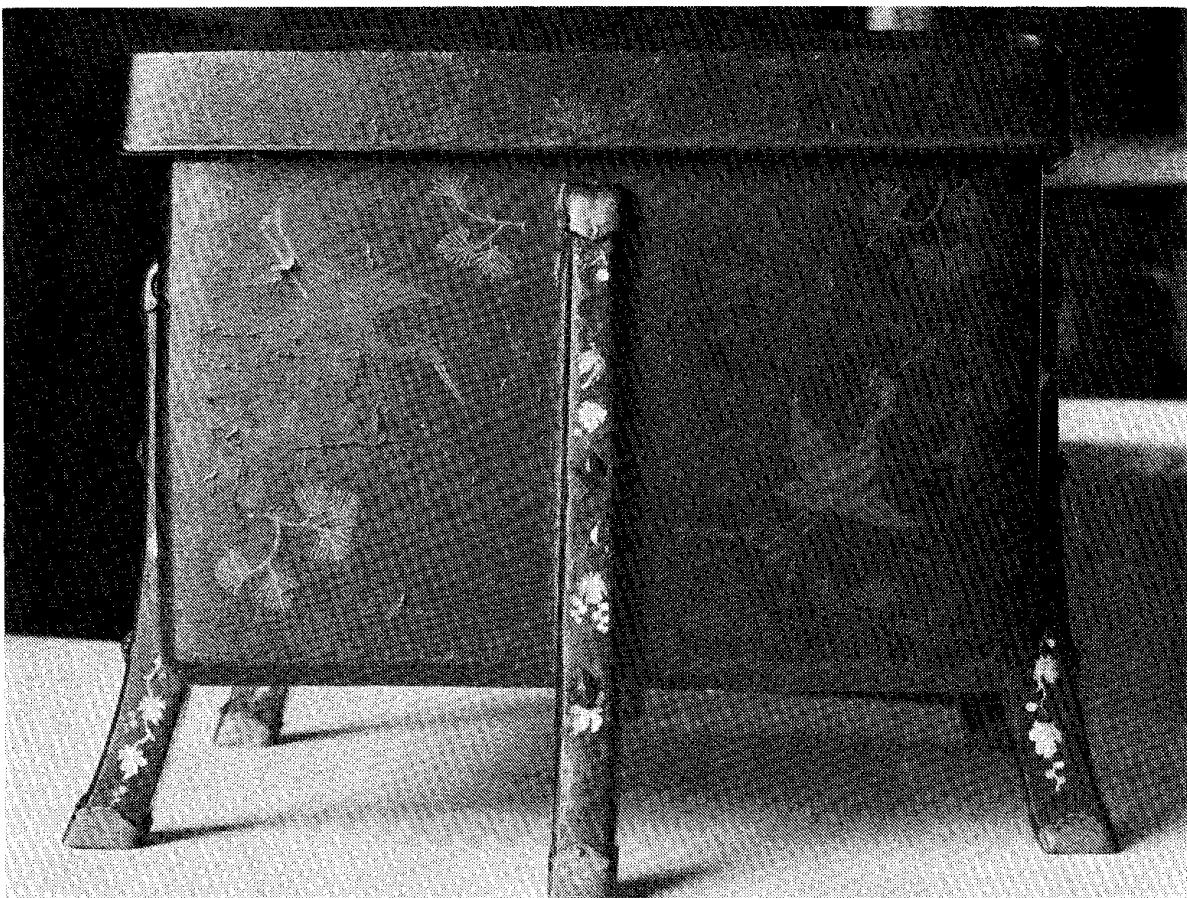
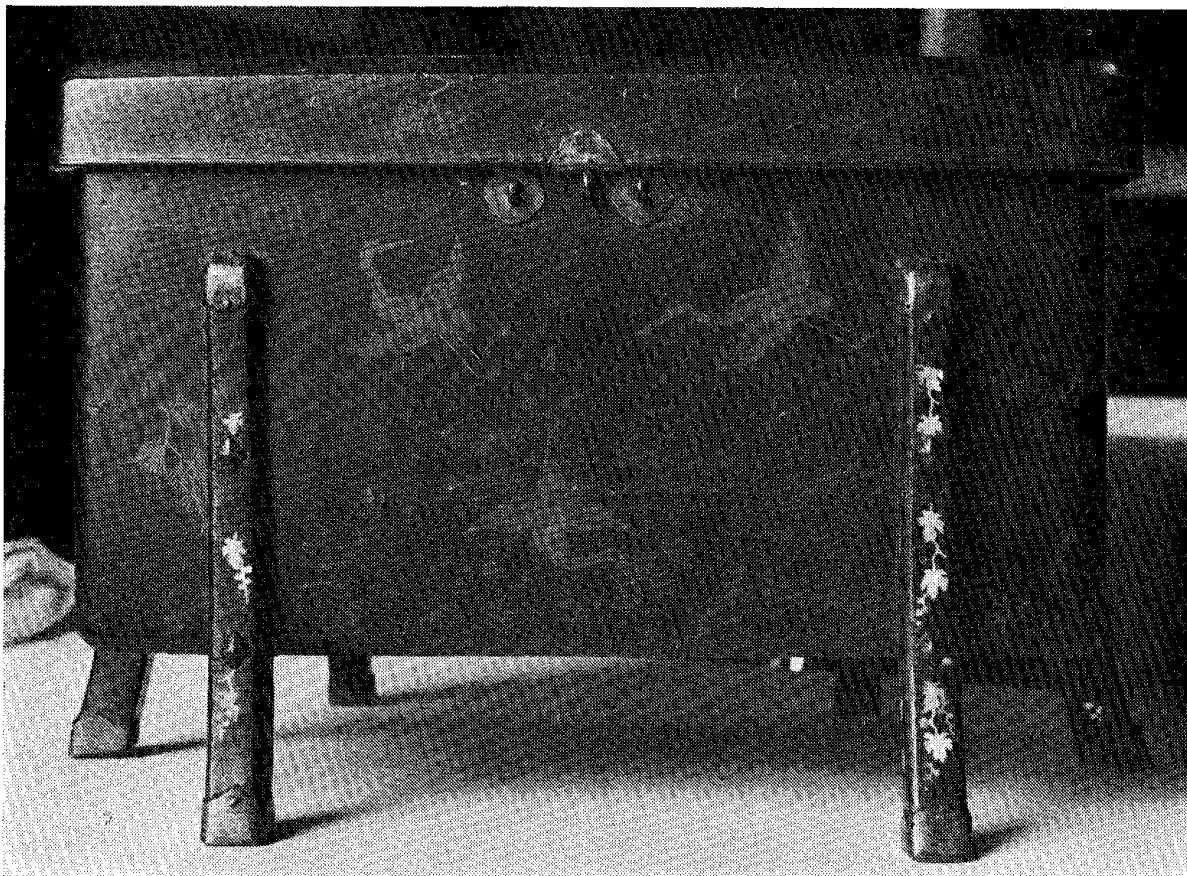
付図-2 双鳳文螺鈿平塵飾太刀



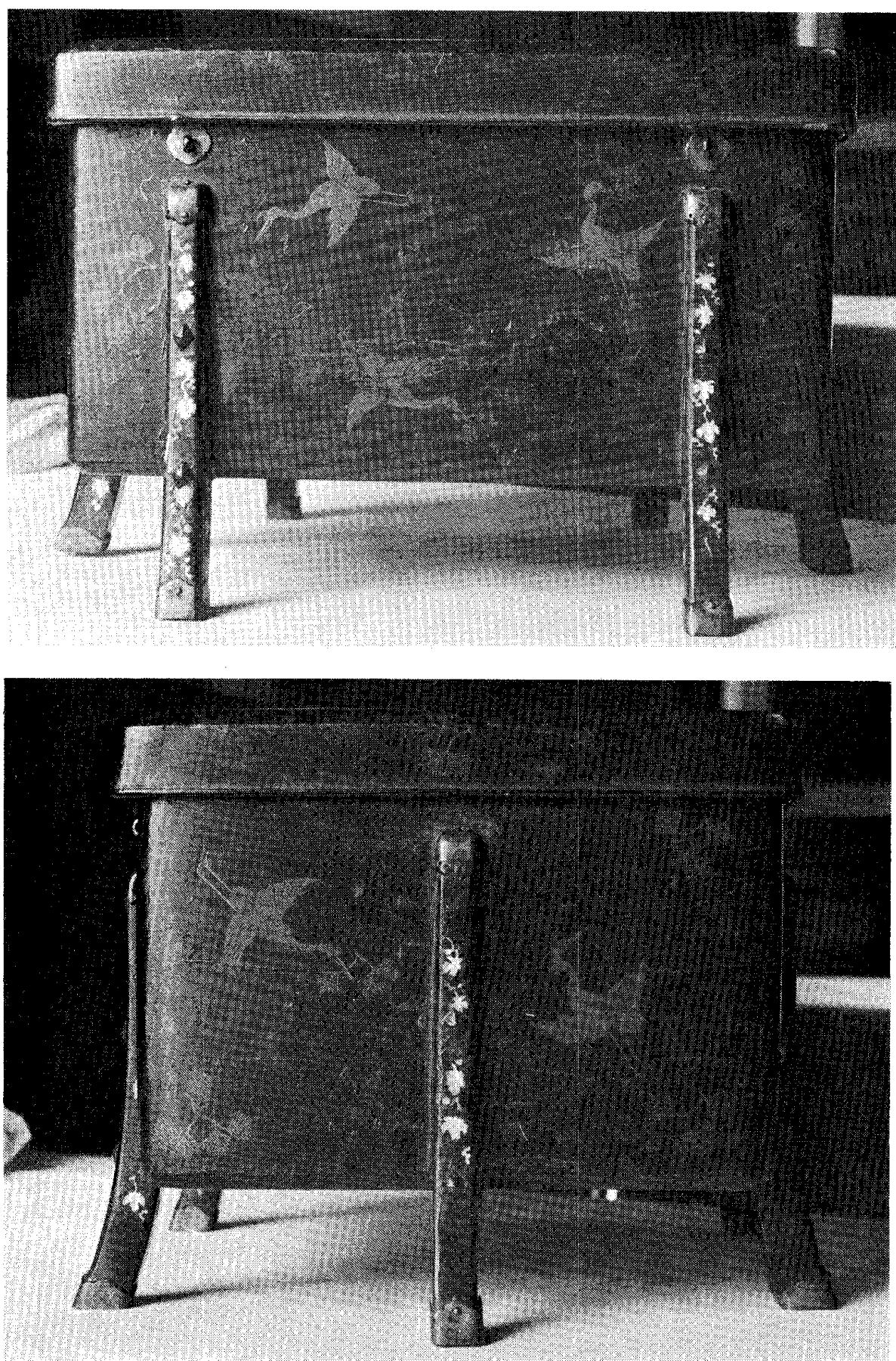
付図-3 宝相華文螺鈿平塵飾太刀  
双鳳文螺鈿平塵飾太刀



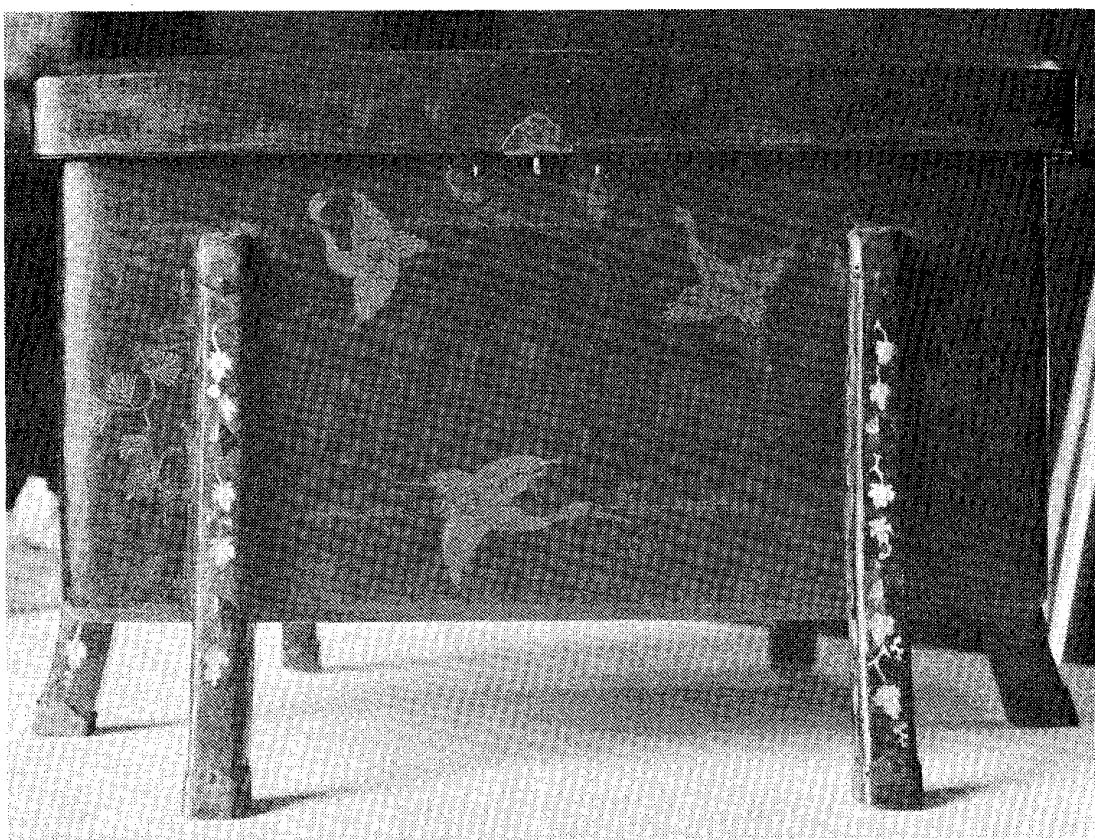
付図一4 宝相華文螺鈿平塵飾太刀



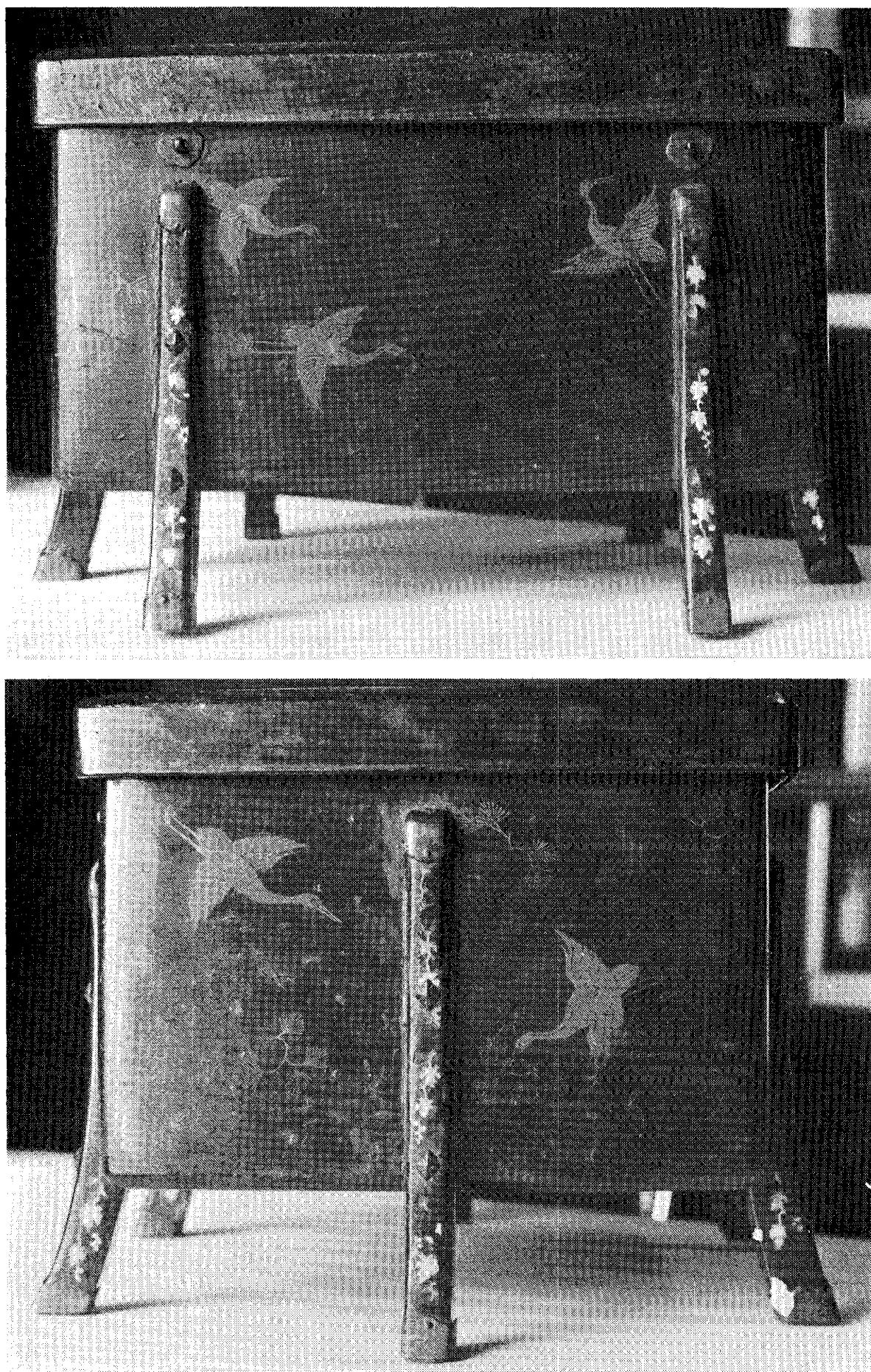
付図一五 松喰鶴蒔絵小唐櫃（宮人宮銘）側面



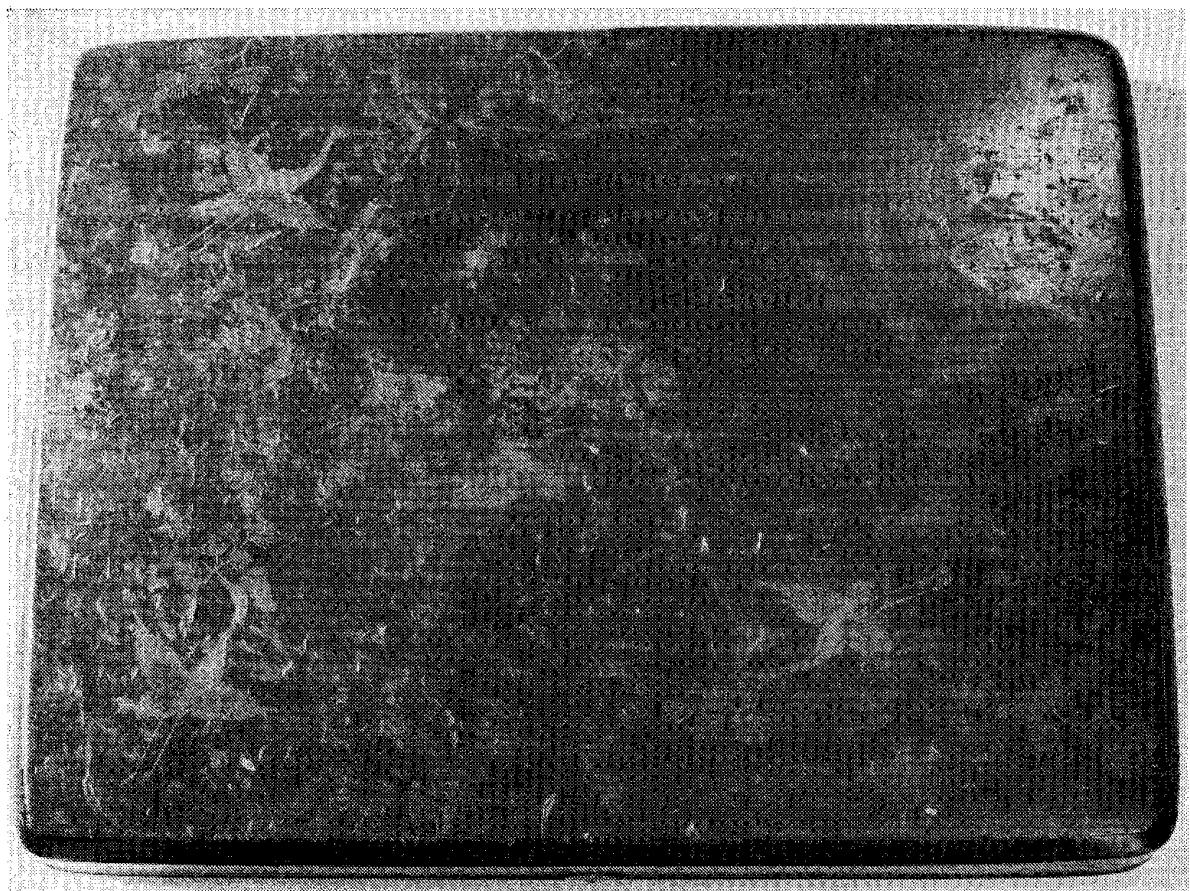
付図-6 松喰鶴蒔絵小唐櫃（客人宮銘）側面



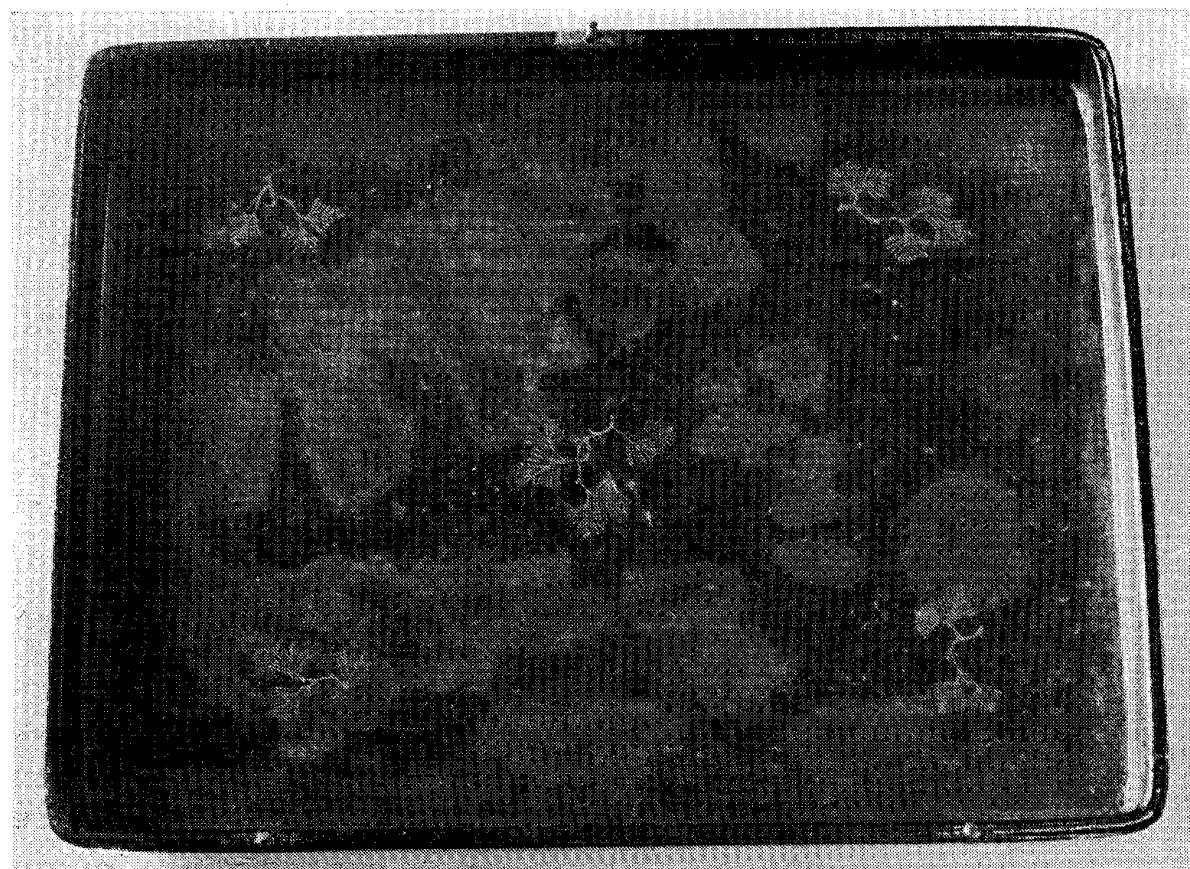
付図一六 松喰鶴蒔絵小唐櫃（中宮銘）



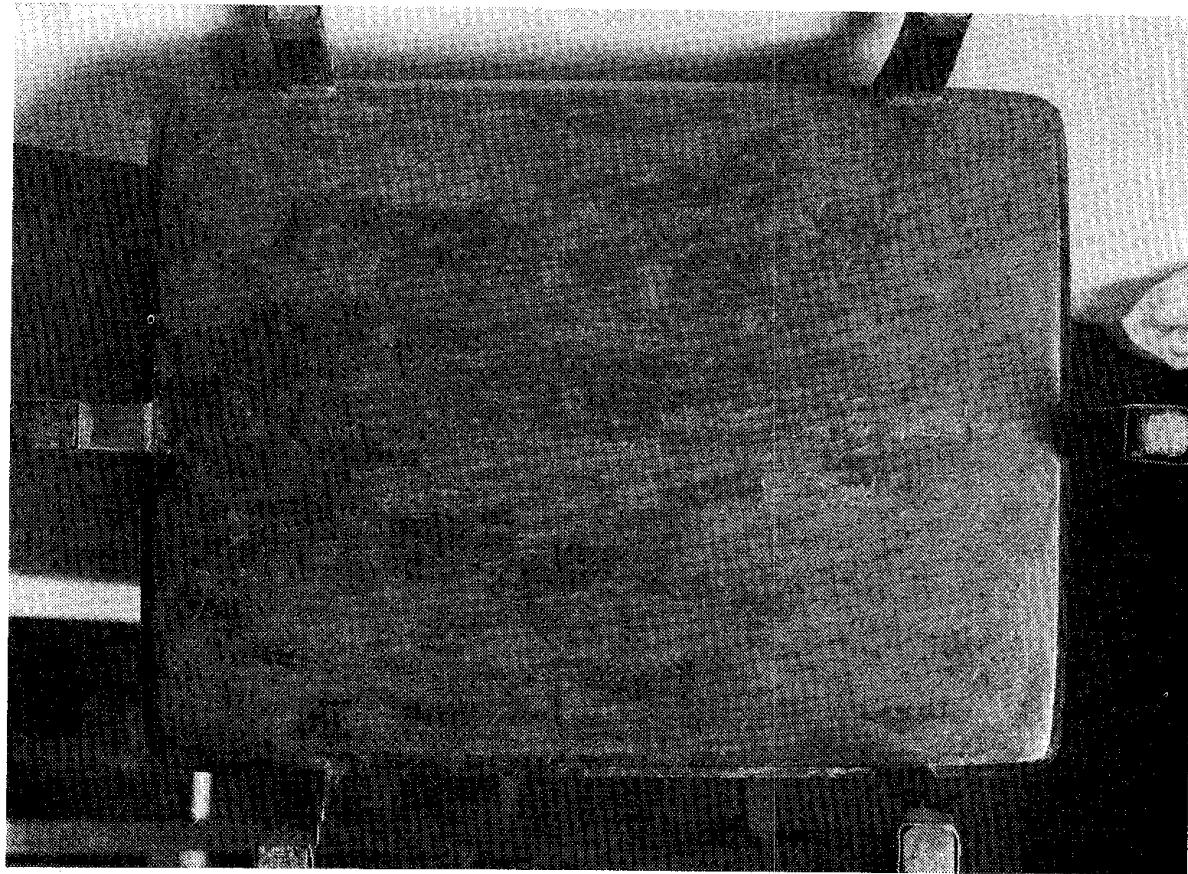
付図一七 松喰鶴蒔絵小唐櫃（中宮銘）側面



付図一8 松喰鶴蒔絵小唐櫃（客人宮銘）蓋甲面



付図一9 松喰鶴蒔絵小唐櫃（客人宮銘）蓋裏面



付図-10 松喰鶴蒔絵小唐櫃（客人宮銘）底面



付図-11 松喰鶴蒔絵小唐櫃（中宮銘）底面